

狼おしがると狐きつね

今年ことしも、もし、一日いちにちでくれて、明日あしたわ、お正月としごけりの元日もとひつだと
 ゆし、十二月ふたつきの、大晦日おしごその、ごくく、さむいばんがたて

おざしきの、障子かきりに、象ぞうを
 はわす法ほう
 りよーほーの手てを、うえの、
 よーにして、しよーじと、ら
 んぶとの、あいだえ、もって
 いきますと、大おほきな、はい
 ろの象ぞうが、で、きます。



したが、一匹ひきの狐きつねが、山やま
の中なかで、ぶらくくと、散さん
歩歩しておりました。
すると、ぢき傍わの笹藪ささやぶ
の方ほうで、何なんだかばさばさ
する足音あしなみがきこえました
から、狐きつねわ、「さー、大變たいへん、
なんでも、人間にんげんか犬いぬめか
が、やって來きおつたな、
と思おもって、みちばたに、
小こさくちやみ上あって、か

くれて見ていますと、で、きたのが、狼オオカミでありました。

狐キツネわ、自分の同類ドウトウだと思おもひましたから、やつと、安心あんしんし

て、「やー、狼オオカミさん、今こんばんわ、どこえおでかけです」と、

あいさつしますと、狼オオカミわ、さも、にくくしい顔付かまづをしま

して、「なあ、狐キツネ、あすわ、正月しんぐわつだつてんで、人間にんげんの奴やつらー、

もちをついたり、お雑煮ぞうじの用意よういやなんかで、なんだか嬉うれし

そーに、さわいでぬるよーだが、おいらー、今朝けさから、な

んにも食たべないもんだから、腹はらがこの通り、すいちまって

こらえきれないのだ。すまないが、何なんぞ食たべさせてくれな

いか。』だつて、私わたしだつても、何なにもたべるものは、ありやし

ない。』よし、ないといふのだな、じゃー、仕方しかたがない、貴あなた

様からさきに、たべてやるから、そー、おもつてくれ。」

こーいはれたもんですから、狐わ、ふるい上つてびっくりしました。「や、狼さん、一寸まっしておくれ、あのね、私もこゝにわ、持つていないのだけれど、私の知ってる家にな、あすわ、お正月だつてんで、鶏を、五六羽、買つてきた所があるんだから、何なら、そこえ案内しますから、今から、一所に行こーじやありませんか。」

鶏ときいて、狼わ、笑壺に入りました。じゃー、一所に行こーつてんで、二獣つれだつて、其家え、いったのです。そこで、狐わ、一獣で、そーつと、中え、はいつて、一羽の鶏を、くわえてきて、狼の前え、おいときまして、すぐ

山の方え、歸って行きました。

狼わ、ぢき、むしやくくと、食べってしまったて、「もー、一羽ほしーもんだな」と思つて、狐わと見ますと、もー、そばに居ませんから、「よしよし、今度わ、おれが、とつてきてやるー、」とゆーので、這入って行きましたか、一體狐から見ますと、することが下手ですから、だめです、すぐ、一羽の鶏が、目をさまして、しきりに、こっけっこー、こっけっこー、と、鳴きだしたり、羽たゝきしたりしましたもんだから、家内の人か、驚いて、手ん手に、棒を以て、出てきて「そら狼だ」と云ーので、いきなり、なぐりつけました、



さいて、あくる日の
 元日ごんじつになりますと、
 町まちでわ、坊ぼくっちゃん
 や、嬢じやうさんたちが、
 朝あさから、外そとえて、
 紙かみ鳶とびをあげるやら、
 羽は子こをつくやら、大おほ
 騒さわで、面おも白しろく、遊あそん
 で居いまするが、獸けだものの
 方かたでわそんなことわ、
 ないので、正まじ月つきだか

らつて、別段、平生と變つたことわ、しないのですから、
至極、樂なのです。

それで、其ばんがたになりますと、又狼が狐のここえ、
やつて、きました、や、狐、昨夕わ、己、ひどい目に、
あつた、一體、貴様が、あんなとこえつれていくのが、わ
るいのだ』「だつて、狼さん、お前さんが、一羽でよせばよ
いのに、あんまり貪食だから、いけないのです』「ま、そ
れわそーと、狐、今日は、正月だそーなが、己、昨夕から
何もたべないんで、腹が、すいて、しかたがないのだ、何
か、御馳走を、ほしーもんだな、……………ないと、ゆ
ーのか、じゃ、すまないが、貴様を食つてやる」

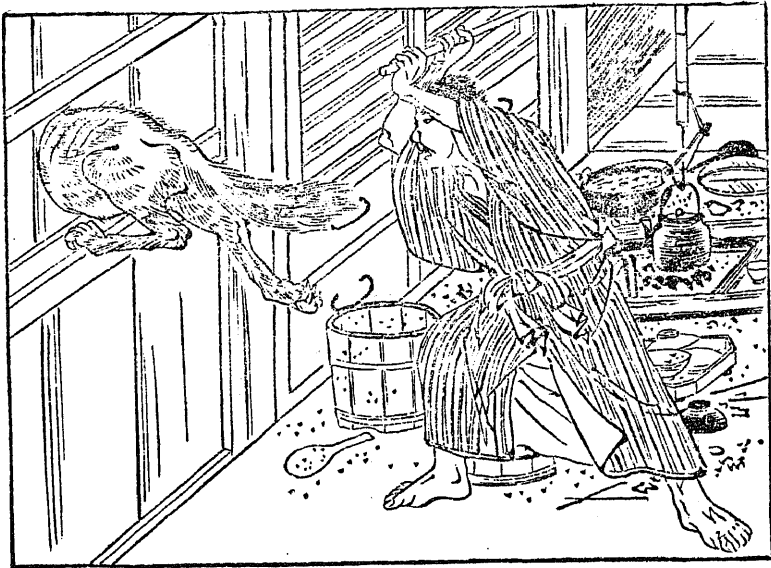
狐わ、そら、又かと思いましたが、今度わ、昨日ほどは、おどろきません、「なーに、こゝにわ、ないのですがね、いーことがあるのです、私の知ってる家に、今日わ、お正月だつてんで、澤山、餅をついて、夫に豚だの、牛肉だの、お料理して、勝手に、しまつて、ありますから、今から、そこえ、おとも致しましよー。」「昨日の様なことは、ありやしまいな」大丈夫、氣遣なしです」萬一、人間がでゝきたら、助けてくれるか」「そりあー、お前さん、親類同志ですもの」

狼も、昨夕に、こりましたから、中々、念をいれて、狐と、助合する約束で、一所に、行きました。

やっこのこと、其家え、きました、戸口わ、しまつて居て、はいれませんから、圓い、小さな窓から、二獸とも、とびこみました。すると、何れ、お正月のことです、お雑煮もあれば、團子もある、鶏や、豚や、牛肉など、澤山な御馳走が、あるので、二獸わ、舌鼓うって、食べにかゝりました。

處が、狐わ、かしこいですから、あんまりたべすぎて、お腹が、大きくなると、前の、窓から、でられないよーになつてわ、大變だと、考えましたので、少し、たべると、すぐ、窓を出て見るのです。

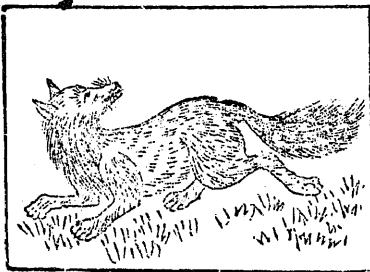
狼わ、一向、そんなことを、考えませんから、もー、一



生懸命で、御馳走を、たべて、い
 ましたが、あんまり、狐が、窓を
 でたり入ったりしますから、不思
 議に、思ひまして、「おい、一體、
 何故、そんなに、出たり、入った
 りしてるのだ」と、ききました。
 すると、狐は、「なあに、萬一、人
 間が、きやしないかと、思つて……
 ……だが、お前さんも、あんまり、
 たべすぎない様になさいな」とい
 いました。が、狼わ、「なーに己、皆

たべてしまふのだ』と行って、やはり、一生懸命に、たべていました。

所が、あんまり、勝手に、やかましいと、ゆーので、家の男が、一人、やってきました。そこで、二獣とも、「そら、人間がきたっ」とゆーので、吃驚仰天しまして 狐が、第一番に、前の窓から、飛びだして、にげました、狼も、續いて、窓から、でよーと、しましたが、あんまり、たべすぎて、お腹が、一ぱいに大きく なりましたから、身体が、半分でたきり、窓 え引っかゝって、出ることも、入ることも、できずに、とーく、捕まって、殺されまし



たとき。

皆さん、
ふしぎな文字
妙な文字を教えましょー。

上
わ、あけはなしの家に大風とゆー字。トをたてる
と「止む」。

券
わ、相撲とゆー字。(月) だしたら勝。
江
わ、無用の者、通るべからず。用があれば通る。